
コープスパルティー ブラッドカバー リピーティッドファイアー

ファリナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コープスパークティー ブラッドカバー リピーティッドファイアー

【Nコード】

N0327P

【作者名】

ファリナ

【あらすじ】

哲志らが通う如月学園が建てられる前。天神小学校が建っていた。そこで起きた「児童連続誘拐殺人事件」。その事件のせいで天神小学校は廃校となってしまった。

如月学園の文化祭が終わった日、どんなに離れていてもずっと友達でいられるおまじない「幸せのサチコさん」を転校してしまう鈴木繭のためにやることに。

しかし、おまじないをやり終えた途端、突然大きな地震が起こって

⋮

コープスパティー ブラッドカバー（前書き）

原作と漫画を参考に作って見ました。

かなり下手くそですが、よかったら読んでください。
感想もよろしくお願いします。

コープスパークティー ブラッドカバー

” サツちゃんはわたしの自慢

わたしのためになんでもしてくれる

わたしのことはもうわからなくなっているけれど

あの子をわたしはあいしている”

ちょうどこんな雨の降る放課後の話しよ。

ここがまだ天神小学校だった頃。

ある女性の先生が校舎階段のおどり場から、転落して死んじゃったんだって。

天神小学校は数年後に廃校になって、その跡地にこの如月学園が建てられた。

新しい校舎に建てかえられた今でもこの時期になるとその先生が校舎の中を歩いてるんだって……。

時計が七時を過ぎても学校に残っていると危ないよ……。

校舎が停電でまっくらになったら、その先生は現れるんだって……。

「まだ残っているの……？早く帰りなさい……？」

ドシヤア！！！！

突然雷が落ちて、

「うわああああああああああつ！！！！」

俺は思わず叫んでしまった。

その声を聞いてみんなが一斉に自分を見る。

俺の名前は持田哲志。如月学園に通う高校二年生。階段や幽霊など怖いものはほんのちょっぴり苦手だ。

今だって階段好きの委員長の話聞いて悲鳴を上げてしまったのだから。

「も〜、哲志ったらあ……」

そう言っただけ教室の電気をつけたのは中嶋直美。

こいつとはなぜか中一の時からずっと同じクラスなのだ。

「ただの雷よ、持田くん」

ニコツと笑って俺を慰めて（？）くれたのは、階段大好き委員長と篠崎あゆみ。

いつも蠟燭を持ち歩いている不思議な子だ。

「ってゆーか、さっきの悲鳴ってやっぱり持田くんだったんだ〜」

「男の子でさっきの悲鳴もどつかと思っけど……」

「『うわー!』」

「おい良樹。それは俺の真似か!？」

あははは。

みんなの笑い声が教室に響き渡った。

「とにかく、片付けしようよ」

篠崎が言うそれぞれ片付けを始めた。

実は今日、文化祭があつたのだ。

その片付けをしていたら、突然雨が降り出し……

「そついえば、こんな雨の日にはね……」

という篠崎の言葉で怪談が始まった。

そんなことをしているうちに、気がつけば七時を過ぎていた。

「ねえ、もう他のクラスいないよー?」

廊下を覗いた直美が叫ぶ。

まあ、この時間になればほとんどのクラスは帰ってるだろうな。

「早く片付けちゃおうよ」

楽しかった文化祭も終わって。

委員長の怪談も終わり……

ビシヤアッ!!

また雷が落ちた。

「う……うわわわわわ!!」

ブレーカーが落ちて教室内が真っ暗になる。

俺はまた悲鳴を上げ、何かにしがみついた。

「ひゃっ!？」

「ん?その声は……直美か……?」

「って……哲志なの??」

「おやおやあゝ?お二人とも、ラブラブ?ですなあゝ」

真っ暗な中そうやって俺と直美をからかってきたのは、直美の親友の篠原世以子。

ちよつとどころかかなり変わってるやつだ。

コンコン……

「!？」

コンコン……

突然聞こえてきたドアを叩く音……。

「これって……まさかっ!？」

篠崎の驚く声が聞こえた。驚いたのは篠崎だけじゃない。

そう。七時を過ぎてから停電になったことも、ノックをする音が聞こえたのも、全て篠崎が話していた怪談と全く同じだったからだ。

コンコン……

鳴り止むことなく続くノック音。

コンコン……コン。

「音が……止んだ?」

誰かが呟く。

みんなは怯えている。もちろん俺だって怖い。

それでも俺はドアへ近づく。

手を伸ばしてドアを開けようとした。

すると、ドアが勝手に開いて。

「まだ残っているの……?早く帰りなさい……?」

「ひいつ!?!」

「きゃああああああああ!?!」

「うわああああああああ!?!」

みんなが一斉に悲鳴を上げた。

「なーんちゃって」

パチツと音がしたと思ったら教室の電気がついて、俺の目の前にいたのは……

「宍戸先生!」

副担任の宍戸結衣先生だった。

「あはは……持田くんって本当、こういうの苦手なのね。そんな持田くん可愛いお客さんが来ているわよ。さ、そんなところにいないでこっちにいらっしやい」

ちよこちよここと廊下から教室に入って来たのは、

「お兄ちゃん!」

「由香!?!」

なんと、俺の可愛い妹、持田由香だった。

由香は中等部の二年生。何でこんなところに来たのだろう……?!

「なにになに? 哲志の妹さん? かゝわいゝ?」

「初めまして。中等部二年の持田由香です。お兄ちゃんがいつもお世話になってます」

女子たちはキヤーキヤーと騒ぎながら由香と話していた。

「何しに来たんだ、由香」

由香に尋ねると、代わりに先生が答えてくれた。

「持田くんに傘を届けに来たんですって」

「そうだったのか……。ありがとな、由香」

「えへへっ」

「はいはい! それじゃあお迎えが来たことだし、そろそろ帰りましょう」

「はい」

俺たちが帰る準備をしていると、一人の女子が泣き出した。

「うう……」

「鈴木さん……。……向こうへ行ってもちゃんと頑張るのよ?」

クラスで一番明るくて、人気のあった女子、鈴木繭は今日が最後の登校で。

「お兄ちゃん。なんであの人泣いてるの……?」

何も知らない由香が俺に聞いてくる。

「……。鈴木は転校しちゃうんだ。だから、今日の文化祭がこの学校最後の登校日だったんだよ」

「そうなんだ……」

「鈴木」

と泣きじゃくる彼女に声をかけたのは森繁朔太郎。

「別にもう会えなくなるってわけじゃないんだ」

「そうだよ、すずめちゃんっ」

「冬休みになつたらみんなで遊びに行くからね」

「でもそれってすずめちゃんが迷惑じゃなかったらだけど」

みんなで鈴木を囲む。

鈴木は涙を拭いて、それから笑顔で、

「ありがとう、みんな。私、2・9にいられて良かった……」

「あの、先生。最後にこれ……」 幸せのサチコさん”、やってもいいですか?」

幸せの……。サチコさん?

何だろうと思っていると、篠崎がポケットから人の形をした不気味な紙人形を取り出した。

「この前、怪談を探している時にたまたま見つけたの。例えみんなが離れてもずっと友達でいられるっていうおまじないなのよ」

「おまじないっ!」

そっぴや鈴木はこっぴやの好きだったんだっけ。

「わかったわ。篠崎さん、頼んだわよ」

「それじゃ……。まずはみなでこの紙人形を囲んで」篠崎に言われた通りに俺たちは不気味な紙人形を囲む。

「困んだら、”サチコさんをお願いします”を、えっと……」
うん。9回、心の中で唱えてね。言い間違えてもかまわず続けて。
もし、言い直したり、人数よりも多く数えたら失敗しちゃうから。
さあ、みんな、心の中で”サチコさんをお願いします”を9回、だ
よ」

みんなが黙って目を閉じる。

サチコさんをお願いします。
サチコさんをお願いします。
サチコさんをお願いします。
サチコさんをお願いします。
サチコさんをお願いします。
サチコさんをお願いします。
サチコさんをお願いします。
サチコさんをお願いします。
サチコさんをお願いします。
サチコさんをお願いします。

「みんな、9回数えた？」

篠崎がみんなを見る。

「ああ。……やべえ、早くしねえともう一回言っちゃまいそつだ
良樹が言うのを聞いて篠崎は頷いた。

「次にこの紙人形のどこでもいいから爪でしっかりと掴んで。掴ん
だらみんなで一氣に

……千切っちゃおうの」

ピシャアッ!!!

その言葉と同時に紙人形を千切って。再び雷が落ちる。

「ふう。……その切れ端を大事に持っててね」

「うん！」

それから帰ろうとして教室を出ようとした瞬間だった。突然教室が大きく揺れ始め、天井に付いていた蛍光灯が外れて落ちてきた。

「きゃあああああああああああ！！！！」

「みんな、机の下に隠れて！！早くっ！！！！」

先生が必死に叫ぶ。だけど、机に向かおうにも揺れが大きすぎて歩くことすらできない。

「ひゃうっ！！」

「由香！！！」

俺は由香をかばう。

揺れは止まることなく、気がつけば床に穴が空いていた。

穴の下は真っ暗で底は見えない。床に空いた穴はどんどん広がって、俺たちの足場もなくなっていく……。

「嘘だろっ！？落ち……っ！？」

「お兄ちゃあん……！！」

「由香！！」

由香は俺にしがみつく。そのまま俺と由香は穴に落ちていく。

「哲志い！！！」

直美の悲鳴が聞こえる。

穴に落ちたのは俺だけじゃないらしい。

上を見ると、直美、篠原、篠崎……他のみんなも穴に落ちていた。

「直美っ！！！」

直美の伸ばした手と俺の手はお互い掴むことができずそのまま落ちていくだけだった。

コープスパークティータブレットカバー

コープスパークティー ブラッドカバー

チャプター1

中嶋直美、篠原世以子

目が覚めるとそこは見ただこともない場所だった。

小さな机に椅子、穴の空いた床。

部屋の壁には小さな窓に黒板、張り紙……。

そして見覚えのある子が倒れていて……

「世……以子？」

倒れていたのは私の親友の世以子だった。

けど、彼女のところまで行くには床に穴が空いていて、一度部屋を出るしかなかった。

「それにしても……さっきの部屋といい、この廊下といい……。こ
こってまさか、学校なの……？」

前の入口から入り、私は親友の元へ走る。

「世以子！世以子、しっかりして！！」

世以子の口元に手を当てると、私はホツとした。

「息……してる……」

「……う……っ」

世以子が呻く。

「世以子、どうしたの！？」

叫んで気付く。

「……アンタ、どこさわってんのよ……」

世以子は私の胸を触っていた。

まあ、こんなのはいつもやっていることだけど、今だけはちよつぴり安心することができる。

だって、こんなよくわからない不気味な場所に連れて来られたのだ

から……。
でも……

「ねえ直美い。ここ、どこなの〜?」

「わかんない。だけど、私たちのいた学校じゃないことは確かよ」「私たちはとにかく部屋の中を歩き回った。

部屋にあった窓を開けて外を見てみようとしてみた。だが、その窓は何をやっても開かず、さらに1ミリも動くことはない。まるで空間に固定されているかのよう。

「ちよつと、直美!これ見てよ!」

彼女の指差す方を見てみる。

そこには張り紙があつて、それを読んだ私は驚くことしかできなかった。

……「天神小学校連絡通紙」……

「天……神小……つてさっきの怪談に出てきた……っ!?」

その後は事件について書かれていた。

それからはここ、天神小学校内を世以子と一緒に歩き回った。

「2-A」と書かれた教室に入り、奥まで行ってみると……

「き……きゃあああああああ!!!」

「どうしたの、直美!??」

「し……死体……死体が……っ!」

私の目の前には男の死体が転がっていた。いつ死んだのかもわからない死体が……。

『……君たち……』

声がした。

「?世以子、何か言った?」

「うにゃ?何も言つてないけど……」

……もしかして、幽霊……っ?

「ふふっ、まさか……ね」

呟いて、立ち上がるうとした途端、目の前の死体から青い人魂が現れた。

『君達が……次の犠牲者力……？』

さつき聞こえた声と同じ声。

この人魂が喋っているというの……？

「ひいつ……！」

世以子が悲鳴を上げる。

「あ……あなたは……いつたい……」

恐る恐る尋ねてみる。

『君達と同じように、ここに監禁された者だ……』

「監禁……！？」

監禁って何っ！？私たち、ここに閉じ込められたって……！？
続けて人魂は言った。

『この学校は君達のイた世界とは切り離されて存在してる。君達はもう……この学校から帰ルことは出来ない』

嘘……っ！？

帰れないって……そんな……。

そういえば、私たち以外にも穴に落ちた人たちがいたはず……。

哲志も……無事かなあ……。

「出られないって……どういうこと？」

『ここは恐ろしい力ヲ持つ怨霊ガ作り出した呪わレた異次元空間。

僕も脱出出来ズ、ここデ死んだ』

確かにこの校舎の窓も昇降口も不自然なくらい動かなかつた。

そんな場所から出ようなんて、本当に無理なのかも……。

「脱出できない……って、他の人たちもできなかったの？」

さつきから世以子だけが質問してる……。

そしてその質問に人魂がさらに答えた。

『怨霊達の力デなんの罪もなイ人達が次々とここへ監禁されていル。けれど、今マで脱出に成功したものはイない……。今回も君達だけではない。同時に連れて来ラれた人間が数人いるよウだな』

やっぱり、哲志たちもここに……っ！

「直美、よかったねっ！」

「うん……っ」

『だが会えない』

「え……？」

哲志たちもここに来てる、と大喜びしていた私たちは……。

「会え……ない？」

『……ここはいくつもの空間が重なり合う多重閉鎖空間になってい
る』

「多重……」

「……閉鎖空間？」

私たちは顔を見合わせる。

さらに人魂は言う。

『君達ノ仲間もこの学校内にいるが、存在している次元が違う……。学校の同じ場所にいても次元が違えば会えない。再び仲間ト会いたければ同じ次元に存在する方法ヲ見ツけなければならぬ』

「同じ……次元？」

なんだかもう、人魂の言っている言葉の意味がわからなくなってきていた。

本当にこれは現実なのだろうか……？

それとも夢……？

それすらも私はわからなくなっていた。

『ソうだ』

人魂の声がする。

『次元を越える方法がわかれば脱出は出来なくとも、一緒に死ぬコ
とくらいは出来るかもしれないナ……』

「し……死ぬって、そんなっ！」

「直美っ、そんな弱気になっちゃだめだよ！」

世以子に言われ、はっとする。

そうよ、こんなことくらいで弱気になっちゃだめ……っ！

それから彼女は言う。

「ねえ、怨霊って何者なの？なんでこんなことするの！？」

「僕にはわからなかつた……。怨霊の正体も、ここから抜け出す方法も……」

怨霊の正体がわからなかつたらどうすれば……

それに、抜け出す方法だつて……。

「君達是一緒の次元二存在出来ただけ幸せだ。頭が二つあれば発想も広がる。僕ノようにはならないデくれ……」

そつか……。この人も怨霊たちに閉じ込められて死んだんだ……。

でも、私たちはみんな一緒にここから抜け出すんだ。

この人みたいに死んでしまう前には……

ガラッ！

突然閉まっていたドアが勢い良く開いた。

「誰も、いない……？」

ドアは勝手に開いたのだ。

「ね、ねえ、世以子……」

「ん？」

「この子……」

私と世以子の間にはいつの間にか一人の女の子がいた。

「ヒイツ」

悲鳴を上げ、人魂は消えた。

それにしてもこの子はいつたい……。

子供……幽霊……？

子供の霊は黙ったまま、笑みを浮かべながら私たちの方を見ていた。

不気味な笑い……。

それに、この感じ……

まさか、この子が……怨霊っ！？

子供霊が笑い声を上げる。

私と世以子は逃げ出した。

「きゃっ！」

足が痛い……。

そういえばこの学校に着いた時に挫いたんだっけ。

私は倒れ、世以子にぶつかって転んでしまった。

「直美っ」

「大丈夫！」

二人はそのまま教室から廊下へと出た。

さっきの子供は追いかけて来ない。

「何、今の……」

「わかんない……。けど、あの子、絶対に怨霊だよね……」

挫いた足は痛いし、変な場所に閉じ込められてしまうし……。

これは本当に現実……？

「もう……嫌……」

「直美、元気出して！きつとすぐにみんなと会えるよ」

「みんなに……？」

「そ。だから、こーゆー時こそ冷静に冷静に、だよ」

そんなことを言いながら……

「……世以子？」

「ん〜？」

なぜか胸を揉んでくる。

「いいこと言っておきながら、この手は何っ！」

「直美さんを元気にするために……」

意味のわからないことを言いながら、それでも私も世以子も笑顔に

なることができた。

そういえばみんなで作ったお呪いの紙……。

「あれっ？」

「どうしたの？」

世以子はスカートのポケットを探り、

「お守りの紙、落としちゃったみたい……。ちよつと探してくる！」

そう言っつて、さっきの教室へ入っつていく。

「あっ、世以子……っ！」

私も世以子の後を追う。

彼女は黒板の前に立ち、それを眺めていた。

その黒板にはさつきまではなかった、子供の落書きのような絵……。四人の子供たちが大きな鋏を持った大人に襲われている絵。

絵の意味はわからないけれど、何だかとても嫌な感じのする絵だった。

「さつきの子が描いたのかな……」

それから世以子の落としたお呪いの紙を二人で必死に探したけど、結局見つかることはなく、仕方ないので諦めて校舎内を歩き回ることにした。

校舎の至る所に死体が転がっている。

早く……帰りたい。

「ねえ直美！あそこ、手帳が落ちてるよ」

世以子の指差す方には一冊の手帳が。

私はその手帳を手にとって読んでみる。

手帳にはこんなことが書いてあった。

『……ねえさま……私はもう駄目です。切断された足首の腱から、血が止まりません。……せめて、ねえさまは生き延びてください……。……痛い……。……鋏で腱を切られた痛みが……。足が無くなっ……。……てしまえばいいのと思う程痛みます……。死ねば、この酷い痛みも感じなくなるのが……。……せめてもの心の救いです……。けれど、……。ねえさま……。会いたい……。もういちど、優しく抱きしめて欲しい……。ねえさま……。一人で死ぬのは寂しいです。ねえさま……。死ぬのは……。……怖いです……。』

その先は大量の血が付いていて読むことはできなかった。

ただどここれ以上はもう見たくない……。つ。

死体を見てみると、手帳に書いてあった通り、足の部分には血がいつぱい付いていた。

手にしていた手帳を戻そうとして、一枚の紙が落ちる。

「新聞の切れ端だ……」

「直美、読んで」

「うん」

私は新聞を読み始めた。

「児童四名連続誘拐殺人事件速報……。我が町の誇る学び舎、天神小学校に於いて忌むべき事件が勃発した……」

ここひと月の間に町内で多発していた「連続児童失踪事件」は当局の捜査の結果、急転直下最悪の形で解決へと向かった。

昭和四拾八年、九月拾八日、午後七時。同校内にて失踪中の児童の亡骸と血の付いた鋏を持ち、放心している教員一名を発見。これを確保した。

「……遺体は全て舌が……り取られ……凶器……駄目、この先は読めない」

「そっか……。そういやずっと前にこんな事件があったってあゆみちゃんが言ってたよね」

「この子供たちって『天神小学校連絡通紙』に書いてあった……」
もしかしたら……私たちを襲ってきた赤い服の幽霊もこの事件で殺された子の中の一人……？

「とりあえず上の階に行ってみようよ」

「そうだね」

私は手帳に紙を挟んで元に戻した。

上の階にはトイレがあり、その代わりか、教室が一つもなかった。

「ちょうどよかったあ」

「もしかして……我慢してたの……？」

二人で笑い合い、世以子がトイレに入り……すぐに出てきた。

「直美……一緒に中、確認してくれる……？」

「はいはい」

トイレに入ってみると、薄暗く、水道の蛇口を捻ってみても水は出てこない。その代わり、水道から出てきたのは長い髪の毛。さらには……

「あれ？」

「どうしたの、直美」

「ここだけ開かないの」

奥から二番目の個室だけ何をやっても開かない。

世以子がドアの下の隙間を覗いてみても、誰も入っていないかった。つまり、この個室だけ鍵はかかっていないのに開かなかったのだ。私たちは外に出ることにした。

「じゃ、世以子、私はここで待つてるから……」

「ちよつと待つてえ」

腕を掴まれ、私は立ち止まる。

世以子は私の耳元で囁いた。

「直美さん……アレ、持つてる？」

「あ……アレって……？」

「アレだよ、アレ！お尻の薬！塗るヤツだよ」

「あはは……普通の軟膏ならあるよ、ホレ」

「イエーイ」

大喜びしてトイレに行く世以子を見ていると、自然と笑顔になれた。彼女が戻って来るまでの間、私は不安になっていた。

いつ、何が起こるかかわからない「天神小学校」。そんな場所に一人取り残された時、私はどうなってしまおうのだろう……？

と、その時。

『お兄ちゃ……ん』

「えっ!？」

突然聞こえた声。

『うわあああ……ん』

「この声……由香ちゃん!？」

それはついさっき会ったばかりの哲志の妹、持田由香ちゃんの声。

私はトイレに駆け込み、

「世以子お!!」

思いつ切り叫んだ。

すると、世以子は出て来た。私はホツとしつつ、そして世以子が入っていた個室を見て驚いた。

「せ……世以子……そこつてさっき開かなかったんじゃ……」

「アレ？そだつけ？何となく入ったんだけど……」

そこは、さっきまでは開くことのなかった個室だった。でも、今はそんなことより……

「あ、あのね、世以子！今、由香ちゃんの声が聞こえたの！」

「え、マジ!？」

うわああああん……

由香ちゃんの声……

早く見つけてあげなくちゃ……っ!

私たちは今来た道を走った。由香ちゃんを探して。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0327p/>

コープパーティー ブラッドカバー リピーティッドフィアー

2010年12月17日17時45分発行